文楽の「曽根崎心中」の舞台

天満屋の段

吉永孝雄

〔舞台装置〕 舞台上手三分の二、新地天満屋の座敷、下手格子戸入口、天満屋千客往来の門行燈が掲っている。船底は土間、座敷二重屋台、中央、大きな梅の花を散らした暖簾で奥が仕切られている。天井に釣行燈。上手二階への段梯子があって二階は障子がはまっている。下手は新地の通り、しだれ柳が置かれている。

〔登場人物〕

天満屋初 新造首（娘の色気あるもの）ひわ色梅柄着付、黒地桔梗打掛、紫無地朱子前帯。

平野屋徳兵ヱ、若男首。薄草色横段格子着付、黒錦子帯。

油屋九平次、陀羅助首。銘仙大柄縞着付、大房羽織紐付小弁慶羽織。

よね衆遊 新造首。傾城元禄胴抜、前帯。

亭主 端役首。銘仙中柄縞上下。

女中 お福首 ねまき

トトトトトと夜風、ドンドンという川の流れの外座、淋しい身にしみる三味線の前奏の中にチョンチョンと開幕の析が這入る。幕があくと前述の舞台、座敷に朱塗り煙草盆が置いてある廓座敷の体。「恋風の、身に蜆川流れては、その虚貝うつつなき」と紅燈の巷に遊女の情が身に沁みて魂うつろな男心を語る。「色の閻路を照らせとて、夜毎に燈す燈火は、四季の蛍よ、雨夜の星か、夏も花見る梅田橋、旅の郎人、地の思ひ人、心どころのわけの道、知るも迷へば知らぬも迷ひ、新色里と暖はしし。」ここまでが枕で新地の宵の雰囲気を太夫は全心全霊をこめて語る。歌舞伎では板付きでお初がはじめから出ているが、文楽では次の「むざんやな天満屋のお初はうちへ帰りても」で暖簾からうなだれて右手を打掛の裾をもち左袖をたれた姿で出て来る。「今日のことのみ気にかかり、酒も飲まれず気もすまず、しくしく泣いてゐる所へ」でやや下手へ行きそのまま坐って心配一杯で首をたれていると「友朋衆の妓衆遊慰め顔に」で二人の妓がしゃなしゃなと上手へ出て坐りお初の方へ向いて中の妓が

身を乗り出し、「ノウ初さま。お前は何にも聞かんせぬか。徳さまは何やら訳の悪いことあって、たんと、ぶたれさんしたと聞いたが、そりゃまあ、ほんまのことかいな」と聞くと上手の妓がしゃしゃり出て、大声で「それいの。わしが客様の話では、騙りを言うて縛られての、イヤ偽判をして括られてのと、ノウ初さん、必ず気落ちしなさんすな。」と右手を大きくふって力付けてまたその手を前帯の下に入れる。「と言はずもがなの慰めを、問ふに辛さの見舞なり。」で、お初はうなだれてじっと聞いていたが、顔をあげて上手向き、「アアイヤモウ言うて下さんすな。聞けば聞く程胸痛み、いっそ死んでのけたい。」と体を背けて目を閉じ、うなだれて、「泣くより外のことぞなき。」で体を起こして朋輩を一寸振返って見、トンと足拍子を入れると下手むきクリズしてもとに返しそのまま、体を心持ゆすってうなだれる。「妓衆も今更詮方の、手持無沙汰に居たりけり。」で互にうなづき合い、だまってしまう。白けた空気が流れる。

「お初は沈む物思ひ、案じながらも表の方」で何思ったか立ち上って、表を見ると「うつつともなく目に写る、夜の編笠徳兵ヱの、思ひ佗びたる忍び姿」で下手の引幕が明くと編笠をかぶった徳兵ヱが胸を抱くようにして現われ、門口に来ると一寸内を覗くとその侭正面となり左足をおろして束になる。「ちらと見るより飛び立つばかり、走り出でんの気はせけど、人目の関のうたてなや」でお初は徳兵ヱの姿を見てハッとし、一寸気遣わしげに上手を振返り、また下手下向き考え、「アヽどうせうぞ、オヽそれよと、そろ〳〵立って庭に下り」で又一寸ふり返り、そのまゝ何くわぬ顔で土間に下り（縁側が引きはずれるように仕掛けがしてある）「こりゃマアいかう気が尽きる。門見て来うと」と上手の朋輩に独り言のように言って、「何気なう、常の素振りに、そっと出で」外に出て、いそいで徳兵ヱの傍に行き、小声のうちにも息はずませ、「徳さまかいの」と言ってハッとして内をふり返り、「どうしてぞ」と道にかゞませ、徳兵ヱの膝に両手をのせ、「こなさんの評判、いろ〳〵に聞いた故、その気遣ひさ〳〵、気違ひのやうになって居たわいのと」力をこめてゆすり、「笠のうちに顔差し入れ人目憚る忍び泣き」で顔近よせて徳兵ヱを見、その侭その胸に顔を埋めて泣く。「男も涙にくれながら」で編笠を脱ぎ目を抑え、「面目もない今日の仕儀」と編笠をじっと見て、「そなたばかりは解ってくれう。」と編笠を地上に置き、「殺してやりたい九平次の極悪人めが」と憎々しげにキッと前に伸び、「たくみに工んだ仕業なれば」と身ゆすり「どう云うたとて理が立たうか。」くやしがり、「言ふほど俺が非に落ちる。」とうなだれる。「そのうち四方八方の」と顔をあげ、「首尾はがらりと違うて来る」とあせり、「所詮生きては世間も立たず。」とキッとのり出し、「疾早今宵は過ごされずと」と引き、「とんと覚悟を極めた

と。」と胸をぐっと押え、「声音も震ひ嗚けば」それを聞いたお初は「こなたも底意目のうちにうむ涙ぞ誠なる」でハッとひきうなだれ顔をそむけて徳兵エの膝に縋り又顔をつけて泣く。徳兵エも目を抑える。

「折に内より亭主の声」で暖簾あけ顔を出しお初の見えぬのに気付き門に向って、「初、コレ初、世間に悪い取沙汰ある。表は人目内に居や。内へ這入って居やいなう」と右手をふって呼ぶ。「初さん、呼んでちゃ、這入らしゃんせと」と吸って居た煙管を持った侭妓が立上って「高ら声に呼び入るる。」お初はふり返って、

「エ、モあれちゃもの、何の話もして居られぬ」と首をふり、「嫁ちゃあらうが暫しが間、わしがするやうにならんせと」立上り右打掛を拡げて徳兵エの背にかけ、「恋し男を打掛の裾に忍ばせ隠し入れ」体を右打掛の下に隠している徳兵エを気遣わしげに見下ろしながら、「這ふ〳〵中戸の沓脱より縁の下屋にそっと入れ」で先立ち裏から中庭に這入り後ろ姿を見せて縁から座敷へ上る。（縁側が引かれ、お初が上ると、もとに寄せられる）徳兵エは縁下に忍び込む。「上り口に腰打掛け」で正面向き徳兵エの頭の上の縁先に坐り裾を縁下に落とすと、裾のうしろに徳兵エの体が隠れてしまう。「煙草引寄せ吸ひ付けて、そしらぬ顔して居たりけり。」で煙草盆を引き寄せ右手に朱の長煙管を取って左で煙草を詰め、盆の火で火を付け口に咥えて吸うと、徳兵エは裾の下手、打掛をあげて顔を出し、そっとお初を見上げる。

賑やかなトコトン、ドンドコ、ドンドンと云う廓の外座の囃子で、「かゝる所へ九平次は廓に好かれぬ粋気取り、ほろ酔ひ機嫌千鳥足」で両袖を流しフラ〳〵と下手から現われ一歩進んでは半歩退り、「鼻唄まじり天満屋の内を覗いて、ヤアコリヤ妓さん遼、淋しさうにどざるの」と這入って来るので徳兵エは素早く裾に身を隠す。九平次はそれに気付かず、「どうぢゃ、この九平次様が客になってやらうかい何と亭主、久しいの」と座敷に上り、中央に座を占めるのが「のさばり上がれば」である。

「それ煙草盆、お盃よと立騒ぐ」で亭主は立上って命ずるので一人の妓が盆を前に出し、今一人が盃の用意に立ち去るのをとめて、「ア、いや〳〵酒は置きや。飲んで来た。」というので皆坐る。「さて話すことがある。皆これへ寄りやと。」煙管で手前をさすのでお初の外、三人心持ち前に膝を進める。「煙草取り出し吸い付けの煙草の煙、輪に吹いて」で遊女の吸付煙草を吸うべきであるのに九平次が左手に煙草盆持ち自分で火を付けて吸うて横柄にプーと煙を吐く。そして煙管でお初をさして「これに居る初が客、平野屋の徳兵エめが」と下手さし、「わしが落した」と自分さし「印判拾ひ、二貫目の偽手形を書いて、この俺を騙らうとしたものちゃ」と首ふり「もと

より根もない嘘八百」と煙管をふり〳〵「理窟に詰って挙句には、のぼせ上って喧嘩沙汰」で上にあげ、おろし、「町内衆にさへぎられ」と両手を拡げ、「却って徳兵ヱ散々に、死ぬるばかりの目に遭うて」上手の妓衆をふり返り、「可哀や、男の一分は廃った。」と体ゆすり、「この後こちらへ来るとも、必ず油断しやるなや」と煙管で前さして首をふりふり、「皆に斯う語るも」と上手をふり返り、「徳兵ヱがうせ居って、鶯を鳥と」両手を前に出し「云ひくろめ」と拡げて閉じ、「まつかいさまに言はうも知れず。何を言はうと誠にしやるな。」と煙管をふり「寄せる事もいらぬぞや」と首をふる。「どうで野江か」で下手「飛田者」で上手をさし、「末は鳥の餌食ぢゃあらう。悪の報いは恐ろしいと。」とぶる〳〵と体を震わせて首をふり「誠しやかに云ひ散らす。」でまた煙管を咥えて煙草を吸う。「緑の下には歯を喰ひしばり身を震はして腹立つるを」で徳兵ヱ顔出し口惜しがるを身の震えで知って煙管を前、下を見てハッとし、「初はこれを知らせじと足の先にて押し鎮め、押へ居るこそ不憫なれ。」で右裾を動かし〳〵て徳兵ヱをなだめる。徳兵ヱは無念がって顔をあげるが、そのまゝうなだれる。

「亭主は久しい客のこと、善悪とかう答へなく」頭をかき乍ら「口ごもりして立上り、ヤ話にまぎれうっかりして居た。ア、ソレ、何ぞお吸物でも上げましや」と紛らかしてぞ入りにける。」で暖簾をあげてトン〳〵と台所へ入る。「初は涙にくれながら」でお初は傲然と煙管を咥えているその九平次をふり返り見て、「お前も友達衆のこと、さのみ憎うは言はぬもの。」と言い返し、「徳様の御事なら」と煙管を前に出し、「幾年か馴染を重ね」でくる〳〵廻しながら見、見、「底の底まで心根を、明かし明かせし仲なるが」と目を閉じうなだれ、「それは〳〵いとしほげに」で膝を撫で、「微塵いさゝかそのやうな」と煙管をふって否定して、「悪いお人ちゃどざんせぬ。」と九平次を振り返って言い、「情が結句身の仇で、だまされさんしたものなれど」でポンと煙草盆を叩いてきっと睨むので九平次は首をブル〳〵とふる。「証拠なければ理も立たず」で懐中から懐紙を取り出して、「この上は徳様も、死なねばならぬ品なるが」と目を閉じ、「ハーテ死ぬる覚悟が聞きたいと」激しく胸を上下させて、「独り言になぞらへて」下を見下ろし、「足で問へば」で裾を左右にふると、「下にはうなづき、足首取って喉笛掛で、自害するとぞ知らせける。」で徳兵ヱは両手でお初の右足（女の人形には原則として足はないが、天満屋のお初に限って足首だけを付ける。）を取って、自分の頸の下にあげ付ける。「オ、その筈その筈」とうなづき、「いつまで生きても同じこと、死んで恥を注がいではと」と懐紙を見て物言いかけるように言って、一寸九平次を振返り、目を閉じ紙を顔に当てゝ「言へば九平次ぎょっとして」首ふり、「エ、コ

レマ気味の悪い」と煙管でお初を差し「初は何を言ふぞい」と体をゆすり、「へゝ何の徳兵ェが死ぬるものぞ」と体をのり出しあざ笑い、「もし又死んだらそのあとは、コレこの九平次が可愛がる。」とキセルで自分を差し、うなづき、「ノウそなたも俺に、惚れてぢゃげなと」お初の肩を軽く煙管で叩く。「云へばお初はオホ、、、」と振り返って九平次を見て口に懐紙を当てゝあざ笑い、「コリャ忝いといふものぢゃ。」と皮肉交りに言い返し、「わしを可愛がらしゃんすと」懐紙をじっと見、煙草盆の提綮に両手をのせ、「お前も殺すが、合点か。」と眦目を押し「徳様に離れて片時も生きて居ると思うて居やるか。そこな九平次の毛虫どの。」とあごでしゃくり、「阿呆口でもおいてたも。人に叩かれても情けない。」と力をこめて言い放つ。そして「どうで徳様一緒に死ぬる。徳様、私も一緒に死ぬるぞやと。」しんみりと言うて「足にて突けば」で右裾を下手へふり〳〵合図すると、「緑の下には涙を流し」徳兵ェはその右足をしっかと抱きしめ「足を取って押戴き、息を殺して焦れ泣き。」顔をつけまた一寸はなして捧げ、顔を足に寄せる。「女も色に包みかね、互に物は言はねども、肝と肝とにこたへつゝ、しめりしめりて居たりける。」でお初は徳兵ェの心を知って顔に懐紙を当てて悲しみに沈む。「九平次も気味悪く」で顔をあげお初を見、「こりゃ、ちと相場が狂うたさうな。」と頭を押え、「これのお初は変りもの。おれがやうに」と両手を前に出して見、「金遣ひのよい大尽様はお嬢さうな」と捨台詞を吐いて、「あさ屋へ寄って一杯しよう。」とポンと膝を叩き、「皆も俺と一緒に来い。」と妓衆を見返り誘い、「ア、かう懐ろが重たうては歩きにくいでへゝ困りやんすと」と両手を懐に入れて胴巻をさぐり腹をふくらせて見せ顎をお初にしゃくって立上り、「悪口たらだら言ひ散らし」土間に下り、わめいてこそはア——帰りけれ」で表に出て肩をいからして帰ると二人の妓女も続いて後からついて行く。「亭主も何と味気なく」でそのまゝ見送っていた亭主は立上って暖簾をあげて台所の者に、「今宵は早寝早仕舞ひ、門行燈の灯もしまや。泊りの客は寝せませい。火の元用心怠るな。皆も休みや。」と命じ、お初の傍に坐り「これお初、そなたも二階へ上って寝や」と言って立つので、ほっとして、「そんなら旦那様、うちの衆もさらばお休みなされませ」と緑に下ろしていた裾をあげて座敷に坐って挨拶する。「お目にかゝるも今宵限り、さらば〳〵」と言うのも待たず主人は暖簾に入るので、お初も徳兵ェを一寸気にしながら上手へ歩み「口のうち、暇乞ひして閨に入る。これ一生の別れとは後にこそ知れ気も付かぬ愚かの心不憫さよ」で悲しさに声の洩れるのを打掛の襟を口に咥えて堪え、目を閉じ、うなだれたまゝ階段を二階へ一足一足あがる。女中は入れ替って暖簾から出て土間に下り門行燈を外し格子戸を閉めて行燈を奥にしまい蒲団を持ち出して

敷き枕屏風を立てる。着物を脱いでトンと横に寝てしまう。「誰が白川の高いびき、早洩れ聞え夜はいつか、更けし廓の火廻りの柝の音に呀ゆる星の空」でカチ〳〵の夜廻りの打つ柝が聞え「火の用心、御用ざの声も眠気に流れけり」でその柝の音も声も遠ざかって行く。

「初は白無垢死に出立ち、恋路の闇の黒小袖、上に打掛け」で二階の障子がそっと明いてお初は柱に手をあて、そっと身を乗り出して下を見るのが「さし足し二階の口より差覗けば」である。「男は下屋に顔出し」で徳兵ヱはそっと樣から抜け出し座敷を伺い、「招きうなづき指さして心に物を言はすれば」で手まねで合図し寝ている女中の方をさし注意しろと伝えるので、お初が徳兵ヱの指さす方を見ると「梯子の下に下女寝たり。吊行燈の火は明かし。いかゞはせんと案ぜしが」でお初は行灯を見て一寸考え、やがてうなずいて「棕櫚箒に扇をつけ」で箒を持ち出し扇を拡げて（縛る恰好をして一寸畳に置くと手摺の下にちゃんと扇を縛ってある箒が用意されている）縛り付け、「燭ぎ消せども消えかぬる。」で段梯子の上から箒を上下するが届かない。「身も手も伸ばしはたと消せば思はずどうと落ちざまに行燈消えて真の闇」で段梯子からお初転び落ちると灯が消える「亭主奥にて目を覚まし」で暖簾から顔を出して「今のは何ぢゃ。女子共、有明の火も消えた。起きてとぼせと」言う声聞いてお初は畳の上に体を縮めている。「起されて、下女は眠むそに目をすり〳〵しどけなりふり起き出でて」こゝは原作では「まるはだかにて」と赤い湯文字姿である。裸で大きな乳房を二つぶら〳〵させて見物をどっと笑わせた所であるが、人形なればこその舞台である。「旦那さん、何ぞ用かいの」と聞くので主人が「何やら大きな音がした。行灯の火をともしてみい」と命じる。これは遠く奥から聞えるように語る。お初はまた低く体をこゞめる。「ほんに、こりゃマア真暗がり、火打箱は何処ぢゃやら」と「探り歩くを蝕らじと彼方此方へ追ひ廻る。苦しき闇の現なや。」でお初は畳に這うようにしてあたりに気を配りながら土間に下り樣の下を覗き探がす。徳兵ヱも追い出て闇の中をさぐり〳〵上手へ来る。「漸う二人手を取り合ひ」で二人の手先が蝕れ、体を探り〳〵互に確かめると、ひしと抱き付き、門の戸際にそっと出で、掛金は先づはづせしが車戸の音いぶかしく」徳兵ヱはお初を引張るように先に立ち戸口に着き、懸金を外し両手を格子戸にかけてそっと明けようとして音がするのでやめる。お初はら〳〵と徳兵ヱにしがみ付いたまま胆をひやしている。「明けかねし折柄、下女は火打をはた〳〵と打つ音に紛らかし、丁と打てばそっとあけ、かち〳〵打てばそろ〳〵明」で下女がコクリ〳〵しながら目をこすり〳〵火打石を打つ音に合わせて一寸二寸とあけて行き、「合はせ合はせて身を縮め、袖と袖とを槙の戸や虎

の尾を踏む心地して二人続いてつゝと出で」でやっと徳兵ヱが戸を明けて、お初を突きやるように外へ押しやるとお初は表に倒れる。徳兵ヱも続いて出て、お初の下手によろけ出て「顔を見合はせア、嬉しと死にに行く身を喜びし」お初の傍により抱き付く。「哀れさ、辛さあさましさ」で二人立上らんとして徳兵ヱは下手へお初は上手へ倒れ、又膝に両手をおいて立上ろうとして倒れ、「あとに火打の石の火の命の」で両人這うようにして近寄り抱き合い、ハッと人形遣いが掛声をかけると両手で二人互に支えるようにしてトン、トン、トンと足拍子を入れてコク〳〵と次第に高く立上って又よろ〳〵と上手下手に倒れ起き上ったお初は徳兵ヱの左手を両手で縋るように持つ。徳兵ヱは下手へ歩もうとしてお初が必死ですがるのでなか〳〵先に進まない。弱々とした足取りで二人は下手へ去る所でチョン〳〵と柝が入って幕になる。この段切は舞台のぐっと盛り上る所で見物をハラ〳〵させるがこの脱出の場面が問題になった。と言うのは近松は誰が掛金を外したとも戸をあけたとも誰が先に外に出たとも書いていない。本を読んで鑑賞する場合はどちらが先であろうが一向差支えがない。しかし芝居は違う。上に郡内とあればその着物を辞書の説明でなく実際にその着地を知っていて、その着物か少くともそれに近いものを着せねばならぬし、その場の事情から判断して徳兵ヱを先に出すか、お初を先に出すか、きめなければならぬ。そこに演出者や演技者の解釈が這入って来る。男と女が逃げる場合は強い男が先に立つのが原則で弱い女はあとである。しかしこの天満屋の場合、真の闇である。この家の構造なり掛金や戸のあけしめはこの家のお初が少くとも徳兵ヱよりよく知っている筈である。するとお初が掛金を外し戸を明け、徳兵ヱが手伝うという形が自然だと考えることも可能である。いろ〳〵と検討された結果、上述の演出となったことを附け加えておく。

お初徳兵ヱ心中道行

三味線の前奏があって「此の世の名残り、夜も名残り」でゴーンと淋しく一つ晨朝の鐘が聞える。「死にに行く身を譬ふれば」で下手からお初、吹流しに手拭を被り、うなだれて上手へ歩む。「仇しが原の道の霜」で、続いて編笠をかぶった徳兵ヱも胸ふさがりながら歩み来る。「一足づつに消えて行く」で左膝を立てて止まり、「夢の夢こそあはれなれ」で顔を見合わせ、トンと背けるように初は上手へ、徳兵ヱは下手向き、顔うなだれて坐る。折からまた鐘がゴーンとなる。「あれ数ふれば暁の七つの鐘が六つ鳴りて」で徳兵ヱは右手で下手をさしてじっと耳を傾け、お初は右膝を下手へ立てゝ聞く。「残る一つが今生の鐘の響きの聞き納め」で二人は身を寄せ両手を合わせる。又ゴーンと鐘が淋しく鳴って徳兵ヱは腕組みして寄り添ったまゝ坐る。ゴーンと鳴る鐘の音と共に立上って、「鐘ばかりかは草も木も」で二人は上手へ歩み梅田橋の上に来る。「空も名残りと見上ぐれば」でお初は頭の手拭を取り、徳兵ヱは編笠に手をかけて空を見上げ、「雲心なき水の面、北斗は冴えて影うつる」で二人は寄り添って欄干に手をかけ川面を見下ろす。「星の妹背の天の河」でお初は後を向け、上手の徳兵ヱを振り返るようにして見、「梅田の橋を鵠の橋と契りて何時までも」で徳兵ヱは編笠を取り向きあうてお初は徳兵ヱの持つ笠の端を取って徳兵ヱを見上げ、「我とそなたは女夫星」で又反対に立ち上がると身を低くした徳兵ヱを見下ろし、「必ずさうと縋り寄り」で二人は抱きあい、「二人が中に降る涙、河の水嵩も増るべし」で初は徳兵ヱの胸に顔を埋めて泣きじゃくる。やがて立上ると三味線の流れる中に、徳兵ヱが先になり、お初は徳兵ヱの持つ編笠の端を持って上手へと去る。川の流れるドンドン、ドンドンの音のうちに舞台が変って天神の森になる。

「心も空も影暗く、風しん〳〵と更くる夜を」で上手から徳兵ヱが先に立ち二人は舞台上手の森の所まで歩んで来ると、「星が飛びしか稲妻か」でドドドドと風音がして森の上を二つ人魂がゆらり〳〵と飛び交う。お初驚き倒れるので徳兵ヱが傍に行くと立上ってその肩に手をかけると徳兵ヱお初の裾をはらってやる。「死にに行く身は気も冷えて」で打掛を脱ぎすてる。「ア、怖わ、今のは何の光ぞや」で人魂を見てお初は徳兵ヱに縋り、後ろ向きに振り返る。徳兵ヱは上より被うようにして、「オ、あれとそは人魂」と見上げ、「あはれ哀しや今見しは」と振返り、「二つ連れ飛ぶ人魂よ」と指ざす。

「正しう、そなたとわしの魂」と右手でお初の肩を抱で左手で撫で下ろす。「そんなら二人の魂か」とお初はふり返り見上げ、「はやお互は死にし身か」と体を切なくゆすり、「死んでも二人は一緒ぞ

と抱き寄せ肌を寄せ」でお初は下手に廻って徳兵ェの両手を取り徳兵ェの胸にひしと身を寄せ顔をそのまゝ埋めると徳兵ェはお初の背に顔を伏せ「此の世の名残りぞ哀れなる」となる。

「初は涙を押し拭ひ」で離れて右袖で目を押え、うなだれ、「ほんに思へば昨日まで」で右手を下手へ廻わし又左手を上手へ廻し、「今年の心中よしあしを」で両手を前にひろげたまゝ見、「よそに言ひしが今日よりは」でトンと上手に左膝を入れ顔を切なくクリズし、「お前もわしも噂の数」で櫛を髪から抜きとって徳兵ェの傍に寄り、「誠に今年はこな様も廿五才の厄の年」で徳兵ェの髪の乱れを優しく梳き直してやり、「わしも十九の厄年とて」で徳兵ェの背に顔を埋め、「思ひ合うたる厄祭り」で髪に櫛をさすと右手で自分の胸を押え、左手をその上にして身をゆすって「緞の深さのしるしかや」で切なくうなだれ、「未来は一つ蓮ぞと」で立上るとトンと足拍子を入れて徳兵ェの傍に寄り、「うちもたれてぞ泣き居たる。」で徳兵ェの膝に手をおき、顔に袖を当て泣き沈むと徳兵ェも右手を懐ろに入れたまゝうなだれる。「徳兵ェ初が手を取りて」で徳兵ェは顔を上げると立上ってお初の両手を取って立上って下手に入れ替り、「何時はさもあれ、この夜半は、せめて暫しは長からで、心も夏の短か夜の」で右手で前を指したまゝ静かに一廻りし、「明けなばそなたと諸共に」でトンと足拍子を入れると左手でお初を指し、「浮名の種の草双紙」で左手より草紙を取り出し、「笑はば笑へ、口さがを何憎まうぞ、悔まうぞ」できっと草紙をひろげ見、また見、腹立たしげにびり〳〵と破り、「人には知らじ我が心」で破った草紙を見てハッとし、「望みの通りそなたと共に一緒に死ぬるこの嬉しさ」で草紙を投げ棄てて胸を押える。「冥途にござる父母に」で右へ体をひいて左手を前に廻して右手を添え、「そなたを逢はせ」でお初の両手を取り、「嫁姑と必ず添ふと」でゆすり、「抱きしむれば」でトンと足拍子を入れて正面上より、お初は背をうしろにして向きあって見上げ、徳兵ェの胸に体を押しつけると徳兵ェはお初をぐっと抱きしめる。「初は嬉しさ限りなく」で体を少し離し下手下から見上げると徳兵ェはやさしく見下ろし、反対に徳兵ェが体を引くようにして低い姿勢で見上げるとお初は見下ろし嬉しさのあまり下手よりトン〳〵と足拍子を入れて上手へ押すようにして「えゝ有難い。忝い。」と徳兵ェを見上げてその胸に体を寄せ、「でも、こなさんは羨ましい。」でトンと足拍子を入れて右膝を立て、顔をひねって左手で差して膝にのせると右袖を口にくわえる。「わしが父様、母様は」で左手を主遣いにあずけ下手へ歩み、「まめで此の世の人なれば」で左膝を立て顔を正面に残しトンと足拍子を入れるとクルリと後ぶりになって一寸ふり返り、「何時逢ふことの情なや」で正面向きに左膝を立てて袖を流す。「初が心中取沙汰を明日は定めて聞くであ

ろ。」で坐って抱え帯を解き、上手の徳兵エに渡し徳兵エがその帯の端を引っぱるとお初は剃刀でスウスウと二つに裂きはじめる。「せめて心が通ふなら」で誤って自分の指を切り、はっとして帯を離して指を自分の口に持って行く。徳兵エこれを見て傍に寄りお初の血のにじむ指を口で吸ってやる。「夢になりとも見て下され。」でまた二人は帯を引っぱってスイ〳〵と切ってゆく。「これから此の世の暇乞ひ。慢しの母様や。名残り惜しやの父様やと」でお初は切り終えた帯を徳兵エに渡して下手へトン〳〵〳〵と小走りに走り口に袖をあて名残りを惜しみ、「声を惜しまず、むせび泣き」で徳兵エも帯を垂れ持ったまゝ目を押え、お初は下手で泣き沈む。両手を膝に置いた徳兵エは「何時までかくてあるべきぞ」と立ち上り「死に遅れては恥の恥」とお初に言いきかせ、「今が最後ぞ観念と」脇差を両手に持ち、「脇差するりと抜き放つ。」で抜いた脇差を左手に添えきっと見て身構える。「刷染重ねて幾年月」で目を押えているお初を見て顔を背け、「いとし可愛としめてねし」で傍に寄り、「今この肌にこの刃と」で刀を上にかざすが、体をひくとお初は傍に寄り引き戻す。徳兵エは坐り膝に手をおき脇差を見てハラ〳〵となるのが「思へば弱る刃先に」である。又徳兵エは気を取直して立上り刃を上にふり上げると、「女は目をとち悪びれず」両手を合掌して「早う殺して殺してと覚悟の顔の美しさ」徳兵エはじっとお初の顔を見る。

「あはれを誘ふ晨朝の寺の念仏の切回向」で徳兵エは左膝を進めてお初を見、ゴーンと鐘の音にハッと寄り抱きしめる。「南無阿弥陀仏」で離れるとお初は合掌する。「南無阿弥陀仏」で傍により「南無阿弥陀仏」で右手をお初のあごの下に入れ、「南無阿弥陀仏」でじっと見て、そのまゝうなだれ、身を引くと両手を合わせる。「南無阿弥陀仏を迎へにて」でお初は帯を持ち立上り、「あはれこの世の暇乞ひ」で徳兵エも立上り左手で拝むと、帯をうけとり、「長き夢路を曽根崎の」でお初が右膝を立てて端を持つとトン〳〵〳〵と足拍子を入れて徳兵エがその端を持って引張り「森の」でチョンと柝が追入ると左手で引張った帯の上に抜き持った脇差をあげてきまり「雫となりにけり」でお初は帯を引張るようにしてトンと足拍子を入れて体を一回転させて帯を体に一巻きさせて正面となり、ゴーンと鐘を入れ三味線をバックミュージックとしてその侭次第に二人は傍に寄り顔を見合わすとトンと足拍子を入れて徳兵エが正面になりハッとかけ声を入れて脇差を上にかさす。お初はうしろを向けて徳兵エを見上げる。チョンと柝が追入ると徳兵エはグッと脇差をお初の咽に差し苦しむお初を見て顔を背けたまゝ抱きしめるとチョン〳〵〳〵と柝が追入って幕になる。この幕切れはいろ〳〵な演出があって脇差をふりかざしてチョンと柝が入る時と、ぐっと突きさした所で終る時と、お初が体をくねらせ、両手をあげて悶え苦しむ所

で幕にする時とあるが、文楽では近松の丸本通りに徳兵ヱの最後まではしない。